

- 1 派遣期日 平成 29 年 11 月 10 日（金）
- 2 学校名（会場名） 長野県長野市立湯谷小学校
所在地 長野県長野市上松 4-28-3
<http://www.nagano-ngn.ed.jp/yuyajs/>
- 3 研修内容 第 29 回北信越地区学校図書館研究大会第 1 日目 公開授業・研究協議
大会テーマ 生涯にわたり学びを支える図書館のあり方

（1）研究概要

視察校における研究テーマは、「図書館を有効に活用しながら学力を高めるこども」である。同校では、読書に親しむ場としての図書館だけでなく、学ぶ場としての図書館の役割に目を向け、研究に取り組んでいる。学ぶ場としての図書館を考えたとき、以下のような課題が挙げられる。

- ①子どもの語彙力や読解力によって、学びの質が左右される。（基礎・基本の上に成り立つ）
- ②知りたいことを調べるための知識や技能が必要である。（学び方を学ぶこと）
- ③教師が学習内容に合った資料の情報について知っていることが大切である。（授業構想・教材研究）
- ④学ぶ場としての図書館のあり方（図書館整備）
- ⑤学校司書との協力、地域図書館との連携

これらについての実践を通して、図書館を有効に活用しながら学ぶ楽しさを味わい、学力を高めていく子どもの姿を目指している。

（2）公開授業

3 年生国語科「食べ物はかせの本」をつくろう

教材名「食べ物のひみつを教えます」（光村三年下）

本単元は、自分の調べたい食べ物について、図書資料を使って調べ、分かったことを「はじめ」「中」「おわり」の構成で文章にまとめ、「食べ物はかせの本」にして学級で読み合ったり、全校児童に読んでもらったりするという学習課題である。

本時は、調べたいことについて図書資料の目次や索引から探し、分かったことを情報カードに書く、という活動が展開の中心であった。授業は、担任と学校司書の 2 名で行われ、学校図書館と連携した授業という設定であった。

＜授業の流れ＞

○本時の課題の確かめ

担任が前時までの流れを踏まえ、本時の課題を確認する。

○本での調べ方の確認

大豆の本を例に、目次や索引を見せ、そこから調べていくことを学校司書が説明する。

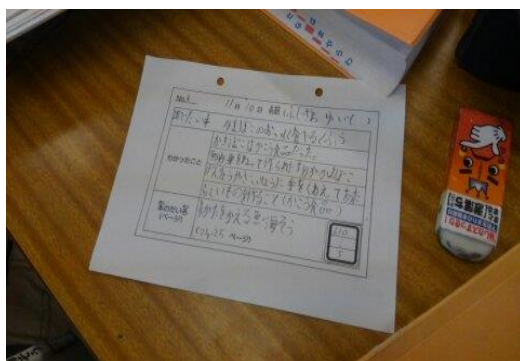
○調べ学習

本から、自分の調べる情報を見つけ、付箋を貼ったり情報カードに書いたりする。読めない漢字や分からない言葉があったら国語辞典で調べる。

○振り返り

児童は前時までに調べたい食べ物を決め、図鑑などの図書資料を図書室で借りている。本時の座席は同じ食べ物や類似した食べ物でグループが編成されていた。各班に国語辞典が一冊ずつ置いてあり、読めない漢字や意味の分からない言葉は調べられるようになっていた。

児童は、「情報カード」に本の名前、調べたこと、日本十進分類法による分類番号などを書いていった。漢字の読み方を教え合ったり、友達のために国語辞典を引いたり、助け合いながら熱心に活動する姿が見られた。しかし、調べたことをそのまま書き写すのか、自分の言葉で書くのかという点が曖昧だったことと、調べる量や進み具合にも個人差があり、参考にした資料によっても情報の質が違ってくるといふ点が課題であると感じた。書き終えたカードは、「情報ファイル」に綴じていった。担任が机間指導をしながらアドバイスをし、学校司書が情報カードを追加で配るなどの支援をしていた。



情報カード



グループでの調べ学習

(3) 研究協議

研究協議では以下の2点について協議した。

- ア 本時の子どもは、学校図書館を有効に活用して学力を高めることができたか。
 - ・本時の児童は、図書資料を活用して意欲的に調べ、調べる楽しさを感じることができていたので、期待する姿が見られたと言える。
 - ・調べているうちにわからない言葉に出会うので、それらについても情報カードに記録しリンクさせていくなど、情報の蓄積も学力の向上に有効なのではないか。
- イ 学校図書館を有効に活用して学力を高めていくにはどんな支援が必要か。
 - ・図鑑などの目次、索引の見方・使い方について、もっと丁寧に指導すべきである。
 - ・必要な図書資料について担任がよく理解し、十分な準備期間をもって、一人一冊以上の図書資料を用意する。

(4) 指導助言

- ・単元の中のどこで図書館が必要かを明確にする。
- ・グループ活動での児童同士の関わり合いも大切。
- ・日本十進分類法の指導。(今回の授業者は6月から指導している。)
- ・次期学習指導要領読むこと(2)言語活動ウにおける学校図書館利用の促進。

4 感想

授業後に、学校図書館の見学もさせて頂いた。読書センター・学習センターとして利用しやすいよう整備し直したとのことで、本の配架や机椅子の配置などに工夫がされていた。特に幅の広い文学については、分野別・発達段階別などのやや細かい分類で、児童が迷わず目的の本が手にとれるよう工夫されていた。カーペットのスペースなどもあり、児童にとって利用しやすい学校図書館であった。また、各所に「先生たちのおすすめの本」が置かれていたり、入り口に話題の本の表紙が貼ってあったりと、児童に読んでもらいたい本が積極的に宣伝されていた。また、オリエンテーションや、ゲーム要素のある調べ学習などで、図書館活用の指導もしているとのことであった。

視察校では、児童と教師の日頃のやりとりの中から、「知りたい」という小さなサインを逃さず、学校図書館へとつなげ、図書資料の紹介などの支援をしているのが印象的であった。やはり、知りたいことについて調べるといふ知的行為の基本は図書館で本を手にとることであると考ええる。本校も学びの場としての学校図書館の整備が急務である。単に読書量を競うのではなく、情報の宝庫、学びの場の核としての学校図書館の在り方を考えていきたい。